

言語普遍性と個別性

郡司隆男

(ぐんじ たかお)

言語の普遍性を重視する生成文法では、言語間の差異をパラメータの差として捉えることがよく知られている。マーク・ベーカーのパラメータに基づく類型論的考察を踏まえて、言語研究における普遍性と個別性の関係を考える。

月刊『言語』2005年8月号

1 はじめに

生成文法と言えば普遍文法である。人類に共通の遺伝的性質の一環として言語（いわゆるI言語）をとらえ、それが、外形（いわゆる 言語）のちがいを越えて人間の脳の中に存在するとする。だから人間の子どもはもれなく言語を獲得するし、人間以外の動物では言語獲得の可能性はずっと低くなる。このような遺伝子レベルの前提を置くと、人間が話す言語はすべて同じものになるはずなのに、なぜ、世界にこのように数多くの言語があるのだろうか？ これは生成文法の根本的な仮定に誤りがあることを物語っているのだろうか？

生成文法では必ずしもそうは考えない。人間としての遺伝子が同じでも、外見に関して、世界中の人間が一卵性双生児のようにそっくりになるわけではなく、同じ遺伝子の中で一定の幅の中で変動があるのだから、言語に関する遺伝子にもそのくらいの変動はあつて当然だろうと考えるのである。

問題は、人間の外見のちがいと同じような変動として、言語のちがいを考えることができるかということだ。単に「ちがつている」くらいのことは誰でも言える。髪の毛の色のちがいにちがかわらずその生える位置が同じなように、言語の外見のちがいを越えて共通のものが明らかにならなくては、科学にならない。

さらに、欲を言えば、「なぜそのようなちがいが外見にあら

われるのか」ということを解明できれば、研究者の満足感は一層増す。そのような試みは歴史上何度も、いろいろな形であつただろうと思われるが、ここでは、生成文法の方でもちがう道具の一つである「パラメータ」というものに話を絞つて、個人的な見解を書いてみたい。

パラメータとは何だろうか。いちおう、言語の性質の中で、普遍性でとらえられない部分というような規定ができるかもしれない。その値によって、世界の中の数多くある言語を何種類かのグループに分けるのである。2つの値をとり得るパラメータが1つしかなければ、世界の言語の数は2つどまりだが、そのようなものが10個あれば最大1024個の言語を区別できる、ということになる。

パラメータという言い方こそしていないが、このような考えの先駆けは、Greenberg (1963) の「一般化」だ。Greenberg は世界の30ばかりの言語の語順を調べ、動詞を目的語の前に置く言語と後に置く言語では、他の要素の位置にも相関があることを明らかにした。これは今日では、主要部方向性のパラメータとして広く知られている。

その後、数多くのパラメータが提案されることになるが、生成文法の方でその後、実際に提案されたことのあるパラメータはすべて、普遍「文法」に付随するものである。つまり、言語を直接分類するためのものでなく、正確には文法を分類するためのものである。したがって、世界に言語が2ⁿ個あったとしても、(二値)パラメータはn個もいらぬ。仮に文法が同じであっても、語彙が異なれば別の言語になるからである。

生成文法の基本的な考え方は、言語は文法があればできる。「生成」とはまさにそういう考え方であり、文法が言語を作り出す。結果としてできる「言語」よりも、それを作り出す「文法」の方に人間のもっている知識の本質があると考

え、それを研究の中心に据えてきたのである。

このような考え方を、「生成文法」ということを表に出さないままに、マーク・ベイカーが『言語のレシピ』(Baker 2001、第3章)の中でうまくいたとえて説明している。彼の奥さんはその名前の通り、パンを焼くのが上手なのだそうだが、ディナーに招待したお客さんにお土産としてレシピを渡すことがあるという。もちろん、その日に焼いたパンをもって帰ってもらうこともあるのだが、そうすると、翌日食べてしまえばおしまいである。一方、レシピをもって帰った客は、自分で作らなくてはいけないという面倒はあるが、その後何度でもおいしいパンにありつけるといふ幸せを手にするようになる。

生成文法でいう「文法」はこのレシピである。人間の子どもは自分のまわりの大人の話す言語のレシピを覚える。その結果、まわりの大人に通じる「言語」を自分で作り出すことができるようになるのである。決して大人の「言語」をそのまま覚えるのではない。

普遍文法は、とりあえず人間の言語らしいものができる大ざっぱなレシピである。それは、基本的な材料(例えば、小麦粉と水)は決められているが、追加する調味料とか、茹でるか焼くのかといったことは決められていない。よく練って細く延ばして茹でればうどんになるが、よく練ってイーストを加えて焼けばパンになる。パラメータは、レシピの中に出てくる、調味料とか調理のしかたのちがいである。

このようなレシピの重要な点は、料理の再現性である。難しい料理になると、鉄人でなくてはならぬという微妙な火加減などがあるだろうが、普通の料理については、レシピがちゃんとできていれば、レシピ通りに作ればたいがいおいしいも

ができる。これと同じように、人間の言語も再現性をもっている。パラメータの値さえまわりの大人と同じ値にセットすれば、同じ言語を獲得できるのであり、言語の獲得に関して、子どもの中に鉄人も名人も達人もないのである。

もう一つ、生成文法のパラメータで大事なことは、多くが二値的で離散的であるということである。例えば、主要部方向性のパラメータは、主要部が最初にくるか最後にくるかのかどちらかの値しかとらない。もちろん、単語を一次元的に並べる場合には、前後のどちらかに置くしかないのだが、一つの言語のコーパスを調べたら、80%で主要部が最初にきて、残りの20%で主要部が最後にくる、などという事態は想定外だということである。また、品詞ごとに主要部の位置が右になったり左になったりということもない。

もちろん、実際にコーパスにあたれば、語順の変動は観察される。また、歴史的に語順が変更された言語はあり、そのような言語は変更の途中の過渡期には、両方の言い方が混っていたかもしれない。しかし、Greenberg 以来の調査結果が示すように、世界の言語は語順が定まっているものが圧倒的に多いのである。したがって、ベイカーは、離散的でなく連続的な値をとるパラメータという考え方を排除する。

以上より、生成文法で使用するパラメータに関しては、次のような点を大事な点としてまとめることができると思う。

- (1) a パラメータは言語でなく、言語を作り出すもの(文法)を規定する。
- b パラメータは言語獲得の1様性を説明する。
- c パラメータは離散的である。

このように、人間の言語獲得に重要な意味をもつと考えられるパラメータであるが、そもそもパラメータはいくつあるのだろうか。それらはたがいに独立なのだろうか、それとも相関関係があるのだろうか。

ベイカーは、『言語のレシピ』の第6章で、11個のパラメータを用いて、13種類の文法を分類した図を示している(図6・4)。11個のパラメータでなぜ²¹の2048個の文法でないのかというと、パラメータの間には相関関係があるからである。例えば、「主要部方向性」というパラメータと「随意的多総合性」というパラメータはたがいに独立と考えられていて、²²の4種類の文法が区別される。しかし、そもそもこの二つのパラメータが意味をもつのは「多総合性」というパラメータの値に関してマイナスの(多総合的でない)場合に限るので、「多総合性」「主要部方向性」「随意的多総合性」の3つのパラメータで²³の8でなく、⁵種類(=1+2²)の文法しか区別できない。

「多総合性」「複統合性」とも「複総合性」とも(という)のは、ベイカーによると次のように規定される(第4章)。

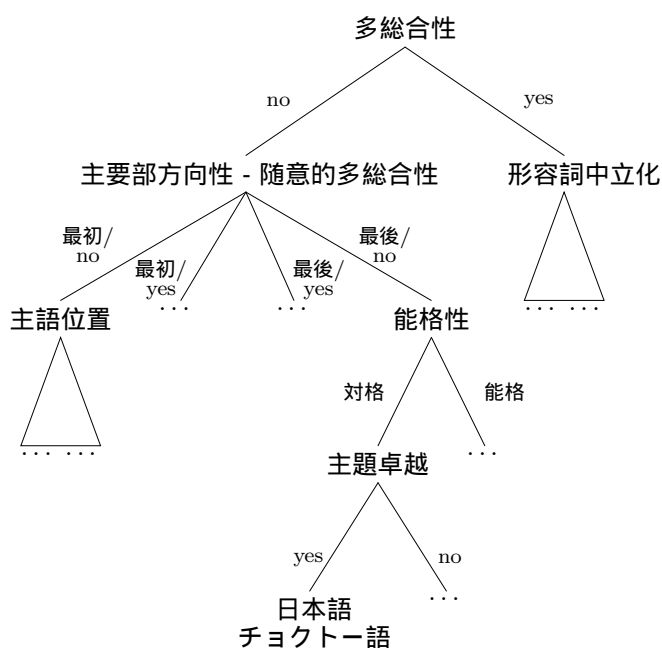
- (2) 動詞は、その動詞によって記述される出来事の主要な関与者(主語、目的語、間接目的語)を個々にあらわす何らかの表現を含んでいないといけない。

つまり、多総合的な文法をもつ言語では、主要部とその補語などは動詞の中に一緒になってしまっているもので、両者の間

の語順を云々することは意味がない。したがって、主要部方向性のパラメータは関与しないということになる。

同様に他のパラメータについても、能格性パラメータは主要部方向性が最後で、随意的多総合性がマイナスのものにしか意味をもたず、主題卓越パラメータは能格性パラメータが対格のものにしか適用されないといった具合である（これらのパラメータの説明は省略）。

そこで、パラメータは二次元的な表の形に整理するよりも、同じ二次元でも木の形に整理する方が見通しがよくなる。これがベイカーの言うパラメータの階層である。図6・4のうち、日本語に関わる部分だけを抜きだすと次のようになる。



このようにして、11個のパラメータを用いても、13種類しか文法が区別できないのである。しかし、図6・4には、各文法のタイプのほとんどに対して、言語の例が2つ載っている。登場する言語の数は23である。本の索引には70ぐらいの言語が登場し、付録の世界地図を見ると、地球上に万遍なく分布している。世界中の言語の文法をまったく分類しても、ベイカーのこの図からそれほど大きくははずれることはないだろうと思われる。

つまり、生成文法の言うところの普遍文法とパラメータの理論が正しいとすると、人間の言語の可能な文法は、十数個のパラメータによって区別される十数個のパターンになるということである。世界の言語の数はここで出てきた文法の数の数十倍あると考えられるから、文法はほとんど同じで、語彙などの別の理由で異なっているとされている言語がいくつもあることになる。

例えば、日本語は多総合的でなく、主要部方向性に関しては最後であり、随意的多総合性はマイナス、さらに、能格性においてもマイナス、そして、主題卓越性に関してプラスという性質をもつとされているが、まったく同じ性質をもつとされているのが、北米のチョクトー語である。

もちろん、日本語とチョクトー語が語彙を除いてまったく同じであるはずはないから、ベイカーの取り上げていない文法的な差異がまだあるにちがいない。しかし、類型論としては、どこかで差異を見ることをやめなくては、単に個々の言語の分類になってしまう。類型論はあくまでも、森を見て木を見ない態度をとるしかないのである。すると、日本語とチョクトー語は同じタイプの言語ということになる。

ペイカーの『言語のレシピ』の原題は *The Atoms of Language* である。彼によれば、「言語のアトム（原子）」はパラメータであり、言語を作るものは、一般に思われているような単語ではなくパラメータであるという。

訳者あとがきで触れたように、実はこの比喻は今一つしつくり来なかったということもあって、邦題には「レシピ」を用いた。先に触れたように、レシピは文法の比喻である。普遍文法は一般的なレシピ（例えば「小麦粉を使って加熱する料理」）であり、個別言語の文法は一般的なレシピに追加の調味料や調理法などのパラメータの値が定まったものである。

このように比喻を整理し直した上で、もう一つ、ペイカーの言う「言語の周期表」という比喻を考えてみよう。これは、第6章のタイトルの一部でもあり、それ以前の章にも度々登場する大事な比喻であると考えられる。

周期表は言うまでもなく、元素をその化学的な性質にしたがって並べたものである。今日では、その並び方は、原子核の中に何個の陽子があるか（いわゆる原子番号）によって決まるということがわかってはいるが、メンデレーエフがはじめて周期表を考案した19世紀には原子の内部構造はわかっていなかった。彼は外見的な化学的な性質だけに基づいて、同じような性質をもつものを並べていって、あの表を作ったのである。

周期表はその名の通り、元素の原子番号が8ないし18増えると同じような性質をもつことになるので、共通の性質を

もつ元素が縦に配置されている。例えば、原子番号が、9のフッ素、17の塩素、35の臭素、53のヨウ素などは、化学的に活性で、他の元素と化合物を作りやすいという性質を共通にもち、ハロゲン族と呼ばれている。今日では、原子番号に対応する数の電子の軌道の中で、最外殻の電子軌道が飽和状態から電子が一個足りないために、化学的に活性になるとされている。

ペイカーにとっては、言語学の方で、周期表の各々の罫目に入る元素に対応するものはパラメータであるという。しかし、その一方で第6章のタイトルが「パラメータの周期表へ向けて」でなく、「言語の周期表へ向けて」という形になっているし、「言語の周期表」という言い方もあちらこちらで見ているので、罫目に入るものを言語と考えているようにも見える。

この比喻では、元素に対応するものとしては、文法を考えるのが一番適切だろうと思う。すでに見てきたように、パラメータは人間の言語に可能な文法のタイプをいくつか提供する。そのような文法のタイプが一定の規則性をもって配置される様を示したのが図6・4である。なぜそのような配置になるのかを説明するのがパラメータであるが、これは元素の周期表で元素（＝原子）がなぜそのような配置になるのかを説明するのが原子番号であるのに対応している。つまり、パラメータの比喻は原子ではなく、原子番号なのである。

しかし、元素の周期表と文法の周期表との間には、大きなちがいがあられるのも事実である。第一に、ペイカーのパラメータ階層に出てくる文法は周期性をもたない。日本語の文法とチヨクトー語の文法の間には、どんな意味でも周期的な関係は

ない。また、元素の周期表が今日では量子力学に基づき素粒子レベルで理解されるのに対して、文法の「周期表」の理解は依然として元素あるいは原子レベルの記述に留まっている。また、物質の世界は言語の世界に比べたらずっと簡単で、自然数だけで、百を超える物質の性質のちがいが説明できてしまっているが、言語の方は、一つ一つが複雑な内容をもったパラメータがさらに十数個なくては、説明にならない。

これは、まだまだ、パラメータの体系化ということに関してわれわれの知識が不足しているためで、将来、各種パラメータを、より少数のさらに奥深い原理群から導き出すことができるようになるかもしれない。

5 おわりに

このように見てきたパラメータであるが、今後どのように研究が進展していくだろうか。筆者はパラメータの専門家でもないし、類型論の最近の動向も知らないで、予想することとはできない。ただ、生成文法のパラメータが基本的には文法のタイプを作り出すだけであるとすると、いずれそこに限界がくるかもしれないという危惧はある。先に触れたように、文法の変異の連続的なふるまいは、はじめから想定外としているが、それでよいのだろうか。

筆者は、離散性を前提に行きつくところまでやってみるべきであるという立場である。そしておそらく、文法のタイプに関してはやっぱり離散的だということが明らかになる

だろう。しかし、一つの文法のタイプから生成される言語の多様性に対しては、パラメータだけでいけるのかわからない。

例えば、図6・4の階層図の末端をさらに細分化しようとして、新たなパラメータをつけ加えるというやり方はどうだろうか。確かに、あと一つパラメータをつけ加えれば日本語の文法とチヨクトー語の文法を分けることができるが、そのために加えたパラメータが恣意的なものでないという保証はない。どんなちがいで、新たなパラメータを設ければ分けることができるが、そのようなパラメータは階層性の枝分かれのごく一部でしか使われず、何かを説明した気には到底なれないものに違いない。これは方法的には不健全なやり方である。困ったときのパラメータ頼みでしかない。

パラメータ階層によって記述される文法の類型を越えて、言語の類型、あるいは言語の周期表に至るには、単にパラメータの数をふやすだけでは駄目である。パラメータ相互の関係をより詳細化し、また、パラメータを補充するような新たな概念も必要になるかもしれない。

【参考文献】

- Baker, Mark C. (2001) *The Atoms of Language: The Mind's Hidden Rules of Grammar*. New York, Basic Books. 郡司隆男訳『言語の原子』春波書房、2003.
- Greenberg, Joseph H. (1963) Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In Greenberg, Joseph H. (ed.), *Universals of Language*, Cambridge, Mass., MIT Press, pp. 73-113.

(神戸松蔭女子学院大学／言語学)